

函館地区における
メニエール病の疫学的検討

白戸耳鼻咽喉科めまいクリニック
白戸 勝

Epidemiological Study of Cases of
Meniere's Disease in Hakodate District.

Masaru Shirato
Shirato ENT Clinic (Hakodate)

はじめに

メニエール病の疫学的調査はレセプト病名による調査、限定された医療機関の調査、限定された地区の調査など、様々な手法により行われているが、未だ確たる調査方法は確立されていない。それ故、発表された数値も報告によりかなりの差がある。今回、私は限定された地区から当院を受診し、単一の医療機関としてメニエール病確実例と診断された症例について検討し、主に罹患率・有病率について推計したので報告する。

対 象

1) 対象地区

当院の所在地である函館市山の手1丁目から半径およそ2 Km圏に在住し、当院を受診したものを対象とした。具体的には表1に示した町名に居住するもので人口約79,600人(平成9年1月末の函館市住民基本台帳で79,593人)である。

2) 対象症例

平成4年10月(当院開設)から平成11年9月までの7年間にめまい・平衡障害を訴えて当院を受診した上記地区の患者975例を対象とした。

3) 対象疾患

日本平衡神経科学会(日本めまい平衡医学会)が作成した「めまいの診断基準化のため

表1 対象地区

山の手1~3丁目	川原町
本通1~4丁目	柳町
鍛冶1~2丁目	深堀町
中道1~2丁目	東山町
東山1~3丁目	花園町
日吉1~4丁目	神山町
神山1~3丁目	陣川町
陣川1~2丁目	松蔭町の一部
柏木町の一部	

の資料」(表2)¹⁾に基づき、問診からメニエール病が疑われ、検査によりメニエール病確実例と診断した172症例を対象とした。

表2 メニエール病の診断基準
(日本平衡神経科学会)

病歴からの診断

- 1) 発作性の回転性(時に浮動性)めまいを反覆する。
- 2) めまい発作に伴って変動する蝸牛症状(耳鳴・難聴)がある。
- 3) 第8脳神経以外の神経症状がない。
- 4) 原因を明らかにすることができない。

検査からの診断

- 1) 聴力検査においてメニエール病に特徴的な難聴を認める。
- 2) 平衡機能検査で内耳障害の所見を認める。
- 3) 神経学的検査でめまいに関連する第8脳神経以外の障害を認めない。
- 4) 耳鼻咽喉科学的検査、内科学的検査、臨床検査学的検査などで内耳障害の原因を認めない。

結 果

1) 全症例の疾患内訳

全対象症例975例の疾患分類を図1に示した。メニエール病関連疾患は278例(29%)であった。関連疾患とはメニエール病確実例、メニエール病疑い例、前庭型メニエール病、遅発性内リンパ水腫である。このうちメニエール病確実例は172例で全めまい症例の17.6%であった。

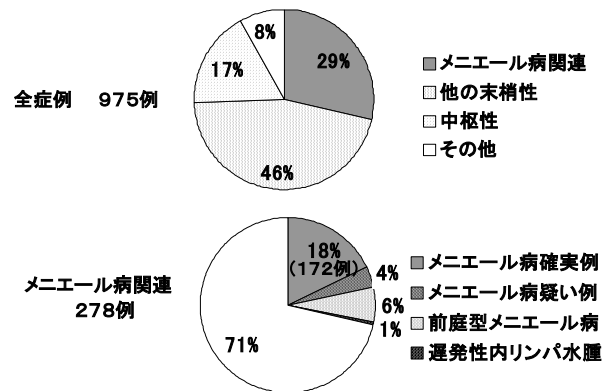


図1 疾患分類

2) 発症年齢・性差

メニエール病確実例につき図2に発症時の年齢分布を示した。問診により初回発作がいつであったのかを聞き出し、発症年齢とした。そのピークは30歳代から50歳代にあった。平均年齢44.4歳で、最年少11歳、最高齢77歳であった。

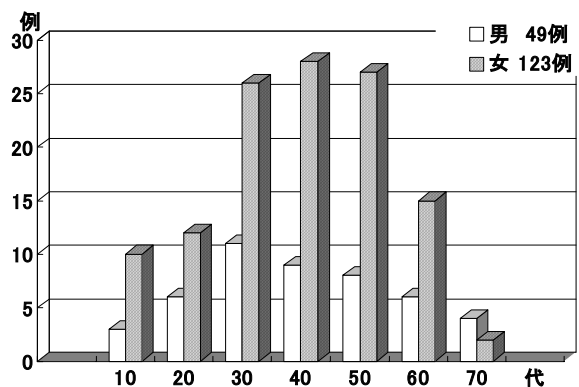


図2 発症時年齢分布

男性49例、女性123例で、女性は男性の約2.5倍であった。

3) 罹患者数

年間の罹患者数を求めた。初診した患者が全て初回発作例とは限らない。そこには初回発作例、以前からめまい発作を反覆している再発例も含まれている。図3に示したように初回発作の年を問診から聞きだし、その年を発症年として年間の罹患者数を算出した。例えば平成X年初診のものの中には初めての発作例(発症)と過去の発症例の再発が含まれている。再発例は、それ以前の該当年間の罹患者数に繰り入れ、また発症から数年たって当院を初診した患者が平成X年発症とわかれば、そこに加算するという方法をとった。この分析の対象としたのは平成6年から10年までの5年間である。

図4に結果を示した。平成9年が25例と多いが、平成6年12例、7年18例、8年17例、10年9例であった。既にメニエール病に発症しているが未だ当院を受診していない患者もいると思われ、将来、この数は若干増えることが予想される。

4) 有病者数

同じ分析方法で年間の有病者数を示したのが図5である。年に1回でもめまい発作を起こして当院を受診した患者を対象としている。勿論、初回発作例も含まれている。平成6,7年は当院開設からそれほど年数がたっておらず、めまい症例そのものが少ないため有病者数は以後の年よりも低値にでているものと考えられる。平成8年64例、9年72例、10年62例であった。

5) 罹患率・有病率

上記の結果をもとに人口10万人対のメニエール病確実例の罹患率・有病率を求めた。先に述べた通り、当地区の住民基本台帳による人口は約79,600人である。この数値をもとに罹患率・有病率を算出したのが図6である。年により差はあるが5年間の平均では人口10万人対の罹患率は20人、有病率は68人であった。

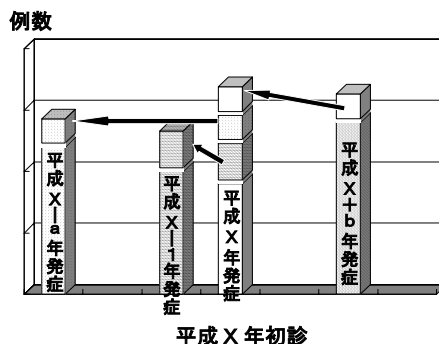


図3 罹患者数の算出法

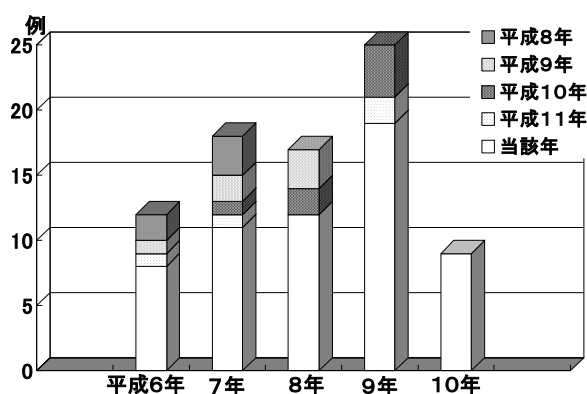


図4 罹患者数

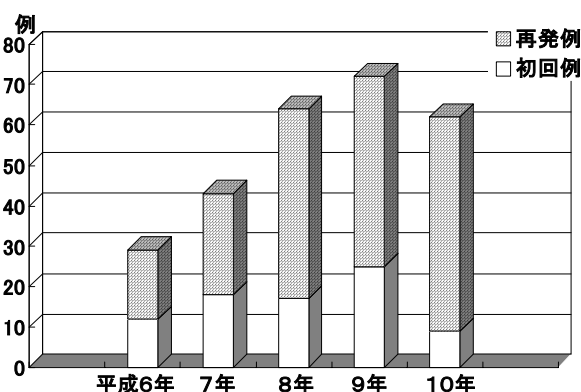


図5 有病者数

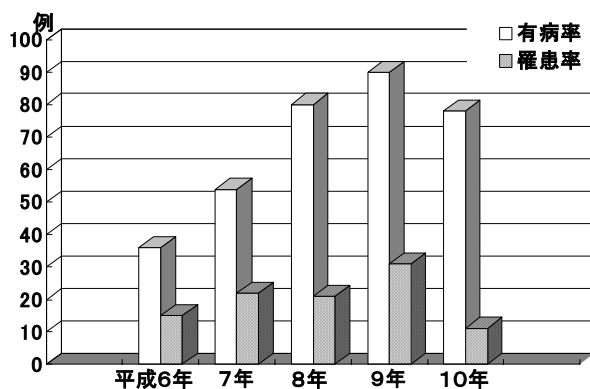


図6 人口10万人当たりの罹患率・有病率

表3 メニエール病の有病率

報告者	発表年	地区	症例数	有病率 (／10万人)
中江、新田、他	1980	全国調査1日集計	403	3.5
		〃 1週間集計	744	7.3
徳増、田代、他	1982	相模原市	180	16.8
水越、將積、他	1985	富山県	61	17.3
岡本、森尾、他	1993	鳥取県1日調査	113	18.4
將積、渡辺、他	1996	新潟県西頸城地区	17	21.4
赤荻、將積、他	1998	岐阜県飛騨地区	53	36.6
		富山県東部地区	71	18.3
白戸	2000	函館市	172	64

考案に替えて、今までに報告されている主な有病率を表3に示した。これとは別に、昨年度の厚生省聴覚・平衡機能系疾患調査研究班（前庭機能異常分科会）の調査にもとづく有病率の推定値は21～48/10万人、罹患率は4/10万人となっている。

ま と め

平成4年10月から平成11年9月までの7年間、当科を受診したメニエール病確実例172例につき疫学的検討を行った。

- 1) 疾患頻度は全めまい症例の18%であった。
- 2) 発症年齢は30歳代から50歳代に多く、平均年齢は44歳であった。
- 3) 性差は女性が男性の2.5倍であった。
- 4) 人口10万人対の罹患率は20人、有病率は68人と推定された。

文 献

- 1) 小松崎篤、他：めまいの診断基準化のための資料。Equilibrium Res 47：247-249, 1988
- 2) Goodman WS：Aural Vertigo, its diagnosis and vertigo. J Laryngol Otol 71：339-355, 1957
- 3) Stahle J, Arenberg K, Stahle C：Incidence of Meniere's disease. Arch Otolaryngol 104：99-103, 1978
- 4) 中江公裕、新田裕史、服部芳明、他：メニエール病の有病率。耳鼻臨床 73：1023-1029, 1980
- 5) 徳増厚二、田代直樹、五島一吉、他：相模原市（神奈川県）のメニエール病疾病統計。耳鼻臨床 75：1165-1172, 1983
- 6) 水越鉄理、將積日出夫、渡辺行雄、他：富山県における前庭機能異常例の疫学的調査研究。耳鼻臨床 78：2451-2459, 1985
- 7) 岡本幹三、森尾真介、瀧田親友朗、他：メニエール病全国患者数の推計－地方自治体実施の全医療機関患者調査よりの推計－。Equilibrium Res Suppl 9：1-4, 1993
- 8) 將積日出夫、渡辺行雄、伊東宗治、他：メニエール病確実例の有病率調査に関する研究－新潟県西頸城地区での調査－。Equilibrium Res 55：314-320, 1996
- 9) 赤荻勝一、將積日出夫、長崎正男、他：メニエール病確実例疫学調査－岐阜県飛騨地区と富山県東部地区における調査－。Equilibrium Res 57：49-53, 1998